たはら歴史探訪クラブ

TAHARA History Inquiry Club

其の79

渥美半島の霊地 2
～雨乞山・鸚鵡石のこと～

鸚鵡石から西に1000mほど離れた山すそで、昭和58年に銅鐸（通称「椛銅鐸」）が2口見つかりました。また、平安時代の歴史書「三代実録」には、860年に村松山中で銅鐸が見つかったと記録されています。この出土地は、江戸時代の記録に、鸚鵡石の西側斜面辺りとされています。椛銅鐸出土地の谷を挟んだ向かいに相当しますが、まさに「銅鐸の谷」と呼ぶべき、東海地方でも特別な場所であったことは間違いありません。その椛の谷から伊川津の集落に抜ける台地の北には大本貝塚があります。この周辺は、貝塚を伴う渥美半島屈指の弥生時代の大集落と考えられています。その集落の発展を支えるため、祭りを執り行い、銅鐸を埋めたのが椛の谷でした。

椛の谷を山すそ伝いに北西に向かうと、雨乞山の山ろくに般若寺があり、その前に、泉校区の名の由来となった「泉の池」があります。ここでは、今でも地区の方々により祭事が行われていると聞きます。この池では、般若寺の鐘楼が燃えた際に捨てられたという、中世のころの瓦が見つかっています。今では一般的な瓦も、当時は有力な寺院しか使われませんでした。渥美半島では、この時代の瓦は、窯跡以外ではまとまって見つかっていません。したがって、この瓦が寺院建物のものだとしたら、渥美半島を代表する大寺院だったはずですが、当時の寺院の様子はまだ明らかにされていません。

さらにこの台地から椛一帯には、奈良時代、渥美半島を開発した渥美一族が、山田町泉福寺を建立した後に移り、住居を構えたという伝承があります。また、文徳天皇（850～858年在位）が住んだとされる文徳屋敷（伊川津古城・6月号参照）もあります。

この谷では、背後にある山の巨岩・鸚鵡石や膳貸石などの伝説が生まれ、さらに渥美半島の開発者、渥美氏の伝説も加わっていきます。

この土地周辺は、相互につながりのある伝説が組み込まれ、現在まで残っています。しかし、これらは人々にとって、伝説では片付けられない、特別な思いがあったのでしょう。弥生時代から続く聖地として潜在的に認知され続けた結果、古代以降は雨乞山、石神という地名など、宗教的な霊地に変わり、現在に至るまで地元の方々の信仰を集めていたことからうかがうことができます。問題は、この周辺が聖地とされた最初のきっかけですが、泉福寺から雨乞山、そして大山までの記念物的な山の形状や景観、磐座を思わせる鸚鵡石や泉福寺および周辺の大岩、泉の池に代表される湧水などが理由にあげられるかもしれません。

この辺りはいまだ知られていない、渥美半島の歴史のなぞを解く何かがあると考えられます。（増山）

▼文化財課☎23局3531

●椛銅鐸

●椛の谷

●泉の池